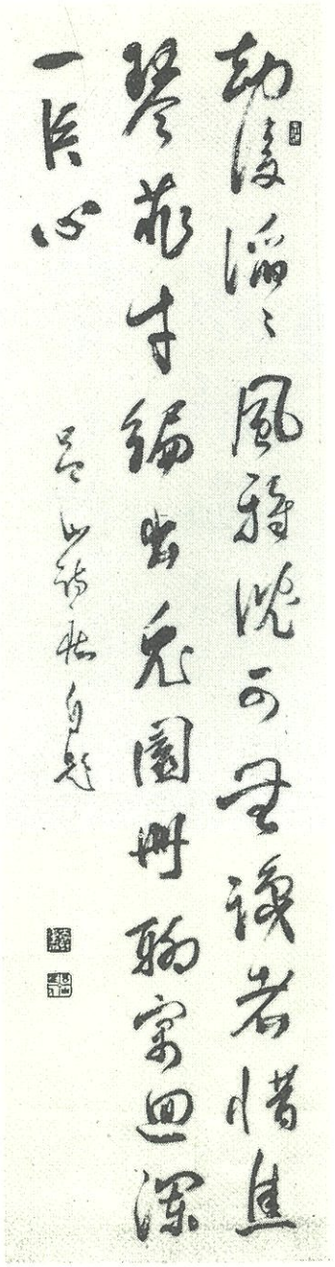
詩語完備 だれにもできる漢詩の作り方

呂山 太刀掛 重男 著

著者　呂山　太刀掛重男　詩書



劫後滔々として風雅沈む。識者の焦琴を惜しむこと
無かるべけんや。菲才編出す兎園の冊。聊か寓す廻
瀾一片の心。

序

漢詩は已に焦桐の歎を受けつつも、その極めて高き境地と、その古典的な幽雅さの為に、全くは荒蕪の一路に堕せず、現代に於ても、多くの人々によって愛され親しまれ、あらゆる法則の困難さに打克ちつつ、この道に潜心する人々の多いことを私は知っている。

ただ時代の自然推移と、漢字の制限などによって、非常な不便さがそれに伴なうことも亦事実である。第一に困るのは「詩語」と称する漢詩にのみ使用される特別の漢語であって、普通の漢和辞典には見られないこの「詩語」が、実は漢詩を作る上に重要なものであるから尚更のことである。随ってたまたま作詩を試みる人があっても、自然に生硬な、杜撰な、稚俗な漢語を用いるが為に、折角の詩も、その雅味と風韻を缺く事になるのである。

こうした今日の慨嘆を十分癒してくれるのが、今回発刊された呂山詞長の「詩語完備　誰にも出来る漢詩の作り方」の一書である。

曾て我々が少年時代に愛用した「詩学活法」の類が、今日では殆んど巷間に見られなくなり、また昭和初期から一般に使用された小宮水心著「漢詩講座」も、雑の部の「詩語」のない事が缺点とされていたが、それらのあらゆる不足を補ない、万人の希望に副う為に書かれたのが、今回の呂山詞長の著書であると私は申したい。

さきに私が大阪の興道吟詩会本部から出版した「漢詩講座」第一巻第二巻は、近来頓に作詩に関心を持って来た吟詠家諸子の作詩入門の手引として発行したもので、その結果、ここ数年の間に相当数の新人が出た事は事実で、私はひそかにその結果を喜んでいるものである。然しこれらの二巻も、何分叙述や説明が簡単なこと、詩語の僅少なこと等の為に到底完璧とは言えなかった訳である。

兎に角、あらゆる方法と努力とによって、我々の斯文興揚の念願が、一歩づつでも前進しつつある事を喜んでいるのである。

今日、呂山詞長の著書を見るにつけても、私は久しい二人の交際を思わないではいられない。そして端なくも風交最初の当時を思い出したものである。それは昭和十年の事であるが、茅原華山主宰の「内観」誌の十一月一日号に書かれた記事の取り持つ縁で、私たちは文通によって結ばれたのであった。その記事には「二十三歳の漢詩人」と題して次のような一文があった。

「漢詩、老人に帰す」という私の句がある。漢詩は老人のものと思いきや、呉市の太刀掛呂山君が、この度「謁頼山陽先生墓」十首を寄せられた。齢は二十三だという。その構想運筆屹として老成の人のようである。私の知れる年少の人にして詩を能くするもの、和歌山県に高橋藍川がある。今更に太刀掛呂山を得た。この双璧出でて、今後の日本詩壇の曙光を認められる事を喜ぶものである。云々

我々両人の風交は実にその時に始まり、爾来詩交の往来実に織るが如く、互いに詩を寄せ懐を叙べ、詩運挽回を約束しつつ今日まで三十年に垂んとしているのである。勿論我々の詞壇に対する影響力は微少であるかも知れない。然し今までその努力は続けて来たし又続けてゆくつもりである。今回の呂山詞長の著書も、その努力の一端として、大いに敬意を表したい。平生教務多忙の身で、而も多数の門下詩人の指導に寧日なき身で、夙夜の執筆の結果になる本書の発刊は、斯壇の発展を約束する最良の指導書として私は推奨する事を惜まない。そしてこの書を熟読し活用することによって、今後更に幾多の新進詩人が打出される事を信じてやまないものである。

昭和三十八年三月

南紀擊竹山房にて　藍川　高橋宗雄　誌す

緒　言

一、本書は最近漢詩を作って見たい人が書道界吟詠界などにふえたのに古本市上に漢詩講座、詩語集成、詩学活法などが入手し難い状態となったため諸方からのすすめによって作った。

一、その骨子である四十二の詩語表は筆者が十余年間にわたって教え子たちにプリントして与えて作詩を指導して来たものであって一般学詩者からも愛用されているものである。

一、作り方の部は詩語表を与えて三十分くらい話せばわかることを面と向って語り得ない人々に話しかけるつもりで、短時間に起草したものである。

一、三十余年の作詩生活と詩人養成活動の成果を世に出すのにかかる貧弱なものしかできなかったことを遺憾に思うが今日の印刷状態では、詩語に送りがなや返り点をつけることすら困難であるのに、まして意味やよみがなをつけることはむつかしい。明治の漢学旺盛な時代ですら入門書の詩語にはよみと意味がつけてあるのに、今日の漢字力の低下した時代に、この書の程度では、決して十分とは言えない。しかし私の教えている生徒は中学を出ただけの文字力でも作っているし、私の門下は小学校を出ただけの力で十分に利用して詩人となっているのだから、本書も活用次第で容易に詩人になれる自信と体験を持っている。

一、この詩語表が十余年間にわたって作られたことは、文字の字体の統一を欠き、かなづかいの統一がない。国語教師である筆者としては自責しているが原稿を統一する時間を持たなかったのでそのプリントそのままを使った。

一、詩語を集録するに当っては先人の著を参照し、詩韻含英を常用したが、頭には常に若い生徒をおいて選んだ。雑題の部には、近年作ったから一般人を対象としたものもある。

一、作り方を書くにあたっては、最も短いページの中に最も効果的な方法を伝えようと苦心した。書いているうちに興に乗じて、

あれもこれもと慾が出て、律詩や古詩にまで及んだ。本書の生命は絶句にあるが律詩や古詩の部も、最重要点で世の詩人たちの看過している要点にふれておいた。

一、今日の詩界（ということばも当らぬほどにさびれてはいるが）に対しても筆者は多くの意見を持っているし、これからこの道に入ろうとされる方々に対しては、特に正しい、すなおな入り方をされるようにとの強い念願を持っている。この書は、そのねがいの一端がこめてある。時には角をためて牛を殺すおそれなしとしないほどに極言した点もある。しかし読者は迷わず従ってほしい。そうして作れるようになってからは他の作詩書の意見もとり入れて、自分できめてほしい。

一、詩がどんなものであるかは、先人の詩を見てもらわねばならぬ。この書には参考にすべき容易に入手できるもののみをあげておいた。

一、詩韻含英を入手するまでのつなぎとして平韻表と、ごく必要な両韻表を付録としておいた。

一、本書を作るに当って、多年呉三津田高校中国詩研究会の会員たちが、この詩語表を謄写してくれ、保存し、再生し、筆者の詩道鼓吹のたすけをしてくれたことに対して衷心より感謝する。

一、筆者は中学四年の時から詩を独習し、平仄を覚えた頃から、詩を人に教えて来た。今に三十余年、あまたの師友のお陰を蒙りつつ、詩道の挽回に鞭を執っているものである。世に負く書を出すのも、一人でも多くこの道の醍醐味を解し得る人を打出したい念願にほかならぬ。世の同憂同好の士が、本書を青少年に、また志ある人に勧奨して下さるように祈念して筆をおく。

昭和三十八年三月

呉江密蔦陵学舎において

呂山詩痴　太刀掛重男

目次

表紙　村上青城先生
題字　服部担風先生
写真詩書　太刀掛呂山
序文　高橋藍川先生
緒言　太刀掛呂山
本文

作り方の部

一、詩とは何か……二
二、詩はだれでも作れる……二
三、詩にはどんな規則があるか……二
四、平仄の公式はどんなものか……三
五、律詩の作り方……九
七、古詩の作り方……三
八、補遺……六
(一)検韻……六
(二)参考書……七
(三)詩誌……八
(四)添削の受け方……八
(五)添削を乞う師……九
(六)作り方への補足……九
(七)和臭ということ……九
(八)語感について……九
(九)虚字について……九
(十)本書を卒業したら……三〇
(十一)詩語表を利用せずに作ること……三〇
(十二)故事について……三〇
(十三)漢文の力……三
(十四)詩病について……三
(十五)風雅交際……三

詩語表の部

春の部

新年作　新年書懐……三六
初春偶成　早春即興　春寒　暖……三八
看梅　探梅　雪中探梅……四〇
春雨　春夜聴雨　雨中看花……四三
春遊　探春　春日田家　春日郊行　春日訪友人……四五
春日遊山寺　春日山行　春日郊行小集……四八
賞花　看桜　花時出遊……五〇
晩春偶成　送春　餞春　雨中送春……五三

作り方の部

夏の部

緑陰読書　緑陰茗話　初夏偶吟……五五
聞鵑　客中聞杜宇……六八
梅雨書懐　梅天閑詠……七〇
夏日海村　海水浴場有作……七二
夏雨　驟雨……七四
夏日舟行　水村夏夜……七五
消夏雑詩　避暑偶作　看瀑　看竹……七七
苦熱　暑日読書　消夏雑詩……七〇

秋の部

新秋即事　新秋夜坐　初秋吟……七二
秋日郊行　秋日田家……七五
秋夜偶題　中秋賞月　秋宵坐月　秋夜書感　秋夜寄友……七七
秋夜対月　九月十三夜小集……七九
夜坐感秋　秋思　秋夜吟……八二
看菊　重陽賞菊　看菊小集……八四
山寺観楓　厳島探秋　題紅葉……八七
晩秋即事　送秋　晩秋閑居……八九

冬の部

初冬偶成　霜晨散策　小春吟……九二
冬夜偶成　寒夜読書　苦寒……九五
雪中作　雪中即事　苦寒　暁起大雪……九七
歳晩書懐　除夕　守歳　除夜寄友　祭詩……一〇〇

雑の部

閒適　読書　吟詠　囲棋　煎茶　端居遣興　喫茶……一〇二
小集席上有作　詩会呈友……一〇四
臥病　贈医　病中偶成　病床寄人……一〇七
寄友人　懐遠人　感慨　贈某君　述懐……一一〇
感傷　偶成　感遇……一一三
偶感　述懐　書感……一一四
送別　留別　別友人……一一七
懐古　過古戦場……一一九
閨怨　美人　宮詞　題麗人図……一二三
初夏遊厳島　観光……一二四
山行　登夏山……一二七
東遊雑詩（函根　日光　京都　鎌倉）……一二九
客中書懐　某道中　客旅……一三二
慶賀　賀婚　頌寿　賀新築……一三四
傷悼　哭人　弔亡……一三六

附録

一、韻字表……一四一
二、両韻表……一四七
三、虚字表……一四九

あとがき

一、詩とは何か

「詩は志なり」と昔からいい伝えられているが千古不磨の名言である。ここに志というのは、自分の志すところというような狭い意味に解するものではない。すなわち感情の動くところをさして志といったのである。されば、また詩は心声なりともいっている。心はもとより形がないけれども、感情の動くところについて表現されたものとして考えると、容易にわかるからしゃれて心声といったのである。こういえば詩とは何かがわかるかといえばそうではない。何十年作っていてもこの人は果して詩とはどんなものかわかっているのであろうかと疑われるようなものしか作れぬ人も沢山ある。そうかと思えば最初からよい詩が作れる人もいる。だからこの問題はいくら説明しても十分には説明しにくいところがあるのだ。だから、読者はこの問題については自分でつねに反省を加えて、先進の作品を見、又、友人の作品を見て領悟するようにして行かねばならぬ。

二、詩は誰にでもできるか

答は簡単である。誰にも作れる。但し文字を知らぬ幼児にはできぬ。僕は多年十五六才の少年に教えて見て誰一人作れぬものはなかった。方法さえ正しく授けるならば誰にでも作れるのである。ただ根気をもって、情熱をもって続けて行くという人でないと大成はしない。大成はしなくても七言絶句くらいは容易に作れるようになる。以下に述べる方法とこの詩語表さえあれば誰にでも出来る。

三、詩にはどんな規則があるか

いよいよ作り方に入る前の重要な問題にさしかかった。ここにはとりあえず七言絶句一首をあげて詩の重要な規約について説明しておく。

金州城外作　　乃木希典

山川草木転荒涼　　十里風腥新戦場
征馬不レ前人不レ語　　金州城外立二斜陽一

（読み方）　山川草木、うたた荒涼
十里風は腥し、新戦場
征馬すすまず、人語らず
金州城外、斜陽に立つ

たれ知らぬものもない乃木石林将軍の名作である。明治三十七年五月二十六日、第三軍が旅順口背後の要害金州を攻略して占領した直後、将軍は馬をはせて新戦場のあとに立って作られた。感慨深い名詩として伝唱されているし、原作の通りで将軍は葉書に書いて東京の一友に送り、野口寧斎という詩人の添削を乞われたが寧斎は一字の訂正もしなかった。さてこの詩では重要な規約の第一にあたるものとして、七言の一句の句作りは、

二字と二字と三字

ということである。山川と草木と、転荒涼との三つに分れている。諸君が若し、俳句や短歌が五七五とか五七五七七とかの切れ目をもっているということを知らぬかと問われたら「人をばかにするな」というであろう。漢詩には一句のうちに、二字、二字、三字と切れ目がある。これを知らぬととんでもない読み方をしたりして恥をかかねばならぬ。たとえば、第二句で

十里の風は　腥く新なり　戦場に

と読んだとしたら、大切な規約を知らぬことになり大恥をかくのである。

しかしこれも絶対的なものではない。短歌や俳句に字餘りも字足らずもあるように詩にも、少々はこの規約をはずれたものもあり得る。しか

しそれは変化を求めてわざとした、大家のやることで初心者のやるべきことではない。最後の金州城外斜陽に立つの句では立斜陽の三字はよいとして金州と城外との二字ずつの熟語で出来ているのだ。という考え方に立てば問題はないが、金州城というのを地名として三字句とすれば外は一字となることも考えられる。その時には二字二字が合して四字となるから、四字と三字とで出来ているのだと考えてもよい。これは極くありふれた変化の一例といってよかろう。

次に三字といった、各句の下三字について考えて見ると、三字はもともと二字と一字とで出来ている。一字と二字といってもよい。転荒涼は、転という副詞に荒涼という述語がついているし、新戦場は新という形容語と戦場という熟語から成り立っている。人不語は、人という主語に対して不語という述語がついているのだ。立斜陽は斜陽という熟語の上に立つという動詞がおいてある。

以上の点は第一に銘記せねばならぬ重要な規約である。この規約を知らぬ人の詩には

衛星船飛行宇宙　（三字・二字・二字）

というような詩を作って恥をかかねばならぬ。

第二に詩というものには必ず韻というものが踏んである。乃木将軍の前記の詩の各句の最後の文字を見てほしい。

涼と場と語と陽との四字を、音読して見てほしい。　涼リョウ・場ジョウ・陽ヨウ　とある一定のひびきをもっている。語はゴであるからひびきが違う。すなわち、第一句、第二句、第四句は同じひびきの尾韻をもった語がおいてある。これは音で読むときの話で訓でよんだらわからぬ。涼は「すずし」で場は「ば」陽は「ひ」であるから韻がふんであるとは気がつかぬ。訓読せねばならぬところでも、音でよんで見てひびきがあっていたら、韻がふんであると思えばよい。――と一応はわかる。しかしこれはむつかしいのであって、韻があっているかどうかという問題は、われらが音読したくらいではわからぬものなのである。涼と場と陽とが同一の韻である。それなら両と丈と養とは前のグループと同じ韻かといえばそうではない。諒と状と漾とも韻は違うのである。韻があっているかどうかということは音で読んで見てからきめるのではない。字書を見てきめるのである。

涼・場・陽の三字は、字書では

涼リョウ 陽 場チョウ 陽 陽ヨウ 陽　となっているし、

両・丈・養は

両リョウ 養 丈チョウ 養 養ヨウ 養　となっているし、

諒・状・漾は

諒リョウ 漾 状チョウ 漾 漾ヨウ 漾　となっている。すなわち字書の下に□があってその中に書いてある漢字が同じであったら韻があうが、同じでなかったら韻は違うのである。□のますの中にはまる字は百六もある。すなわち韻の種類は百六あるのである。（韻表を参照せよ）

第三には平仄というものがある。さあ平仄とは何か。前記の□のますの中に 陽 養 漾 と韻がしめしてあるほかに□のすみに □ □ □ □ と小さいしるしがつけてある。あのしるしが平仄を表わしているのである。そのしるしの位置によって □ は平であり、□ は上であり、□ は去であり、□ は入であり、この四つを平上去入の四声というのである。そうして上去入の三声を一しょにして仄声といって●で表わし、平声を○で表わし、詩にきまった平仄の公式があってそれに合わせて作ってあるのである。平仄とは何か。それは漢字音の強弱によって抑揚のない平かな発音するものを平声といい、シャープな抑揚のあるものを仄声字というのである。何故そんな必要が漢字にあったか。それは中国の文字は発音の数が少く、文字は多いのでどうかして、同じ「ヨウ」と発音する文字でも抑揚・アクセントによって区別したいという

考え方から始まったものである。この点をくわしく説明すればよいがそれは音韻学といって一科の専門の学となっているもので初心の人にいくら説明してもわかりにくいもの故、前記のことをまる覚えしておいてほしい。さて平仄を見分けるにはどうしたらよいか。答はただ一つ。字書を引いてしらべること以外にはない。ただ一つ □。の入声字だけは音さえわかればわかるとされて来た。「フクツチキ」に平字なしといって音のしりに「フクツチキ」がつけば入声であるから絶対に●すなわち仄字である。例えば竹・チク　側・ソク　月・ゲツ　日・ニチ　識・シキ　で合・ガフ　葉・エフ　などは今日ではゴウヨウとしか覚えていないからわかりにくい。蝶・テフ　と知っていなくては入声ということはわからぬ。

四、平仄の公式はどんなものか

七言絶句の平仄式には二通りある。

七言絶句平起式

（起）○○●●●○○―韻　（承）●●○○●●○―韻
（転）●●○○○●●　（結）○○●●●○○―韻

七言絶句仄起式

（起）●●○○●●○―韻　（承）○○●●●○○―韻
（転）○○●●○○●　（結）●●○○●●●○―韻

右の公式で起・承・転・結というのはそれぞれ第一句を起句といい、第二句を承句、第三句を転句、第四句を結句という意味である。右の公式で見ると起と結は同じだ。起と転は反対だ。又平起式と仄起式とは、起・承の入れかえだということが見たらわかる。この公式は必ず記憶しておかねばならぬ。

では右の公式にあてはまるかどうかを乃木将軍の詩で調べて見よう。

山川草木転荒涼―陽　十里風腥新戦場―陽
征馬不前人不語　金州城外立斜陽―陽

となっていて、新、征、不、城の四ヶ所が平起式の公式にあっていないがこれでよろしいのである。それは

一三五不論　二四不同　二六対という大原則があるからである。但し「下三連は除く」という原則もある。今新戦場の新は一三五の五にあたるからよろしいだけでなく、新を○としても○●○となって下三連にならぬが 転荒涼 を 渾荒涼（すべて荒涼）としたら下三連となるからいけない。

次に孤平ということがあって、七言の四字目と五言の二字目がひとり平となって仄にはさまれるのを禁じる。たとえば前の詩の承句をかえて

十里血腥劇戦場としたらどうか。四字目の腥だけが孤平となるから許されない。いまこの血や劇が●であることは血・ケツ　劇・ゲキ　と音で見ると前に書いたフクツチキのツやキがあるので入声だから仄だとわかるのだ。

それでは次に前記の平仄式を書きかえて見よう。◑は平仄いずれでもよいという意味である。

我本天仙侶　久謫在塵区
商飈一夕起　帰思不可拘
星漢燦爛紛在目　恍然咫尺望天衢
雲車風馬駕何晩　吾将従此朝清都

一韻到底格で 虞 魚 の通韻である。平区拘衢都は虞韻で、初居は魚韻である。この詩を見ると、五言四句を挿入していて、殊に古詩平仄に適わぬ点がある。しかしこれで全然無視したものではない。詩想表現上、やむを得ないから破ったものである。こんなに破れるのが古詩平仄論の特長で近体平仄式では絶対に破ってはならぬ。この詩は傑作で、秋になると吟じて楽しんでいる。少し説明しておこう。

秋の気たるや顥々とすみきっている。山川もさびしく、露霜のおりる初の頃。天界は蒼々としてはてしなく、一体どこが秋の神の居であろうか。私はもと天仙であったが、罪をうけて塵のちまたにいる。秋風が一夕起ると帰思はとどめがたい。星や銀河がきらきらと輝くと、うっとりと天が近く見える。さあ、雲の車よ、風のかごよ、仕度がおそいぞ、私は天帝の都にあいさつに行こう。というのだが何と、心のすがすがしくなる詩ではないか。

一体古詩の長さはこれくらいでよい。下手の長談義で、五十韻百韻と作ったものは読みとおすのに一苦労で詩美を味うなどというところまで行きかねる。平仄がむつかしくてという人に、それでは五言古詩でも作りなさいというが、平仄にへこたれるような分際では八句の古詩すらよう作らぬ。先師空谷は絶句から、律に入る前に八句の古詩を作れと、教えてくれた。

八、補遺

(一) 検韻

検韻には字典がよい。平仄辞典というものも古本で三種あるが、つまらぬものだ。宇野哲人の明解漢和辞典（三省堂）がよかったが絶版になった。新刊で容易に入手できるものであり、且つ詩を勉強するのに最もよいものとしては左を推す。

字源　簡野道明　角川書店

○ 韻書

韻書としては

詩韻含英異同弁　（本書巻末を見よ）

がある。他に詩韻精英というのがよい。韻府一隅は無理だ。

○ 韻表

次の表について

番号は昔からこれをつけて覚えたものである。

通韻というのは古詩で説明したが、古体の詩では通用してよいのである。発音もよく似ているのに注意されたい。

この表でもわかるとおり「トウ」とよむ韻は沢山あるし、それが平上去と三声が系統的にあるのだから、音だけでは平仄のわからぬことがこの表でよくわかる。ただ入声だけは、ｆｋｔがつくものでフクッチキに平字なしといってよくわかる。

韻表

	平声	上声	去声	入声	音韻 国尾中の
通韻	1 東 2 冬 3 江	1 董 2 腫 3 講	1 送 2 宋 3 絳	1 屋 2 沃 3 覚	ng～k
通韻	4 支 5 微	4 紙 5 尾	4 寘 5 未		
通韻	6 魚 7 虞	6 語 7 麌	6 御 7 遇		
通韻	8 斉 9 佳 10 灰	8 薺 9 蟹 10 賄	8 霽 9 泰 10 卦 11 隊		
通韻	11 真 12 文 13 元 14 寒 15 刪 1 先	11 軫 12 吻 13 阮 14 旱 15 潸 16 銑	12 震 13 問 14 願 15 翰 16 諫 17 霰	4 質 5 物 6 月 7 曷 8 黠 9 屑	n～t
通韻	2 蕭 3 肴 4 豪	17 篠 18 巧 19 皓	18 嘯 19 效 20 号		
通韻	5 歌 6 麻	20 哿 21 馬	21 箇 22 禡		
独用	7 陽	22 養	23 漾	10 薬	ng～k
通韻	8 庚 9 青 10 蒸	23 梗 24 迥	24 敬 25 径	11 陌 12 錫 13 職	
独用	11 尤	25 有	26 宥		
通韻	12 侵 13 覃 14 塩 15 咸	26 寝 27 感 28 琰 29 豏	27 沁 28 勘 29 艶 30 陥	14 緝 15 合 16 葉 17 洽	m～f
計	30	29	30	17	

(二) 参考書

参考書は今迄あげた他にいろいろある。本書と同じ性質のものでは

(1) 漢詩講座　臨江詩閣編　名著刊行会復刊
(2) 詩語集成　川田瑞穂著　松雲堂書店復刊

などがよい。

次に詩についての評釈書がいる。いかに詩を作るといっても古人の詩の研究なくしては一寸の進歩もない。評釈書は無限にあるが、古本や、入手し難いものはあげないで、ここに新刊書店に依頼すればとり寄せてくれるものばかりをあげておく。

新唐詩選　吉川幸次郎著　岩波新書
唐詩選　前野直彬著　岩波文庫
唐詩選詳説　簡野道明著　明治書院
和漢名詩類選評釈　簡野道明著　明治書院
漢詩作法入門講座　太刀掛呂山著　名著普及会

なお、石川忠久氏に多くの詩の鑑賞法の著書があってよろしい。

次に

中国詩人選集　一集と二集　岩波書店　というのがある。第二集は続行中だが、いずれも京大出身の新進の学徒の手になる唐宋元明清にわたる代表的詩人の選集に、詳解が施してあって極めて好書である。

詩語表の説明

一、二字の熟語のうち第一段の ○○ の部と第三段の ○○ の部には別に区別はない。同様に ●● の部の熟語第二段、第四段にも区別はないから同様に用いてよい。

一、三字の熟語は ●○○ と ●●○ との間にその三字句の一番下の語の属する韻がその間に一字示してあるから、その示してある韻字を挾んだもの同志が一つのグループとして同一の詩の韻脚に用いることが許される。たとえば、次頁の新年作の部では又春風と万里風との間に「東」の字が入れてある。この東の字が又春風、万里風の列の韻脚を示したものであって、ずっと左に見て行って、気蓬々、一阿蒙までが同一の詩の、韻脚に用いることが許されるのである。その下段の答明時と欲暁時との間には「支」と示してある。その「支」韻の語群はずっと左に見て行って復奚疑、不到飢までが「支」韻として同一の詩の韻脚に用い得るのである。同様にして、吐清香と椒酒香の間には「陽」の字が入れてあってこれらの三字句は、「陽」韻に属するもののみが集めてあることがわかる。

一、一番下の二列の ○●● と ○○● とは、転句に用いることが許されるところの三字句である。○●● の欄は平起式の転句の、下三字に、○○● の欄の語は仄起式の転句の下三字に入れる語である。ただし五言絶句では起句にも使用する。

一、○○ の欄の語でもたとえば新年作の一番上段の一新には一に・がつけてある。これは一新が実は ●○ であることを示すのである。同様に ●● 欄の和気には和に。印が施してあるから和気は実は ○● の語であることがわかる。しかし詩の公式の一三五不論になるところであるから四字目の孤平を避けるなどの注意を忘れずにおけば、自由に使用できるのである。

一、三字句の列のたとえば ●○○ の列の一番上の ● の列を鉛筆で掩えば ○○ の二字の熟語欄となる。●●○ の下の列を掩えば ●● の二字熟語がとれる。こうして一頁の詩語は自分でふやして使用されたい。

一、東風が ○○ で山色が ○● であることが詩語表でわかるから、東山が ○○ で、風色が ○● であることを知ってほしい。○● の風色の語は公式の ●● の列に使用できることも自明である。

一、一詩を作る時には必ず、終りに入れてある虚字表の部も参考にして虚字を適当に入れるとよい詩になる。

一、△を付したのは平仄両用文字である。

一、各題の終りに時に四字句が掲げてある。これを利用すれば四回の接合で絶句ができるが、初心者がこれにばかり頼っては上達しない。

一、公式は頭に記憶していても必ず、紙に書いてから文字をはめて行くこと。

一、詩題は別のところにあっても同一韻である下三字の語は一つの詩の中に用いてよい。二字の詩語は全巻を通じて用いてよい。

新年作　新年書懐

（△印は平仄両用文字）

○○ 新春　新詩　東風（＝春風）　人心　一新　千門　五雲　満天　春光　題詩　窮途　屠蘇　吉祥　風流　街頭　読書　洋々　詩成　蓬々　過来　高吟　吟朋（＝詩友）

●● 和気　欲賦　自改　山色　天地　旭旗（＝旭旗）　万里　靉靆　旭日　禿筆　生計　満肚　閑酌　醒到　韻事　松竹　貧計　前路　一笑　瑞気　力学　知是

○○ 青春　新正　昇平（＝太平）　歳朝（＝元旦）　風雲　乾坤（＝天地）　由来　欣々　風和　賦詩　揮来　一杯　勿辞　賀正　詩情　門松　雖貧　少年　草堂　浮生　無功　全家

●● 風物　淑気　四海　詩句　万戸　気象　草木　盎々　揮筆　未放　椒酒　快飲　客到　又遇　相映　依旧　立志　景物　一夢　無効　無恙　白屋

東

●○○ 又春風　已春風　瑞雲中　五雲中　日瞳々　曙光紅　対晴空　海天紅　太平風　酒杯中　寄詩筒　有窮通　坐春風　寸心忠　酒思融　気蓬々

●●○ 万里風　笑語同　気象雄　旭日紅　淑気通　初旭紅　残夢中　瑞気籠　窮与通　問碧翁　度恵風　万古同　憐老衷　字々雄　無寸功　一阿蒙

陽

●○○ 吐清香　記星霜　野梅香　早梅香

●●○ 椒酒香　題墨香　一草堂　入酔郷

支

●○○ 答明時　早梅披　入新詩　又題詩　賦新詩　寸心知　本無私　尚天涯　淡生涯　引初曦　好容姿　好追随　感懐滋　尚堪為　日章旗　復奚疑

●●○ 欲暁時　多所思　迎歳時　忽有詩　我亦知　写小詩　不可追　梅一枝　淑気移　迎友時　酒一巵（酒一杯）　酬旭旗　強托詩　増鬢絲　知者誰　不到飢

灰

●○○ 喚春来　曙光催　一瓶梅　写疎梅

●●○ 淑気催　春又回　春色開　瓶裏梅

転句

○●● 詩骨健　清筆硯　千載事　詩未就　迎旭日　旗影暖　身尚健　身好在　閑日月　香和酒　波不駭　吾欲老　年十八　無所答　初日上　存宿志　人未老　人不返　空逝水　風物改　春盎々　宜買酔

○○● 波瀾濶　少年志　春粧好　向誰説　詩書業　恩波洽　無官楽　屠蘇酒　風雲斂　拝年信　故人信　平安信　梅花夢　尋常事　団欒夢　少年夢　快心事　身康健　双親健　春風底　独題句　恍如夢

功名　青襟（＝書生）　紅粧　意中　呉江　阿蒙　梅花　東山　春従　滄桑　飄零　頽齢（＝老齢）　百年　滔々　辛盤　昭和　仁風　春回　先慶　双親　健康　弊衣　向君　向誰　革新

寄信　到底　児女　子弟　白首　呉下　志業　瓶裏　影裏　白酒　眼閲　唱和　自愧　世路　物換　十八　吹洽　門巷　麗日　食餅　如我　破帽　傲世　感慨　欲説

為君　如流　人生　依然　汪然　卅年　依々　鏡中　海波　一樽　紛々　無窮　半生　邦家　履端　星移　眼前　晨鶏　三元　熙々　不関　陶然　人情　生涯　所思

万事　白髪　忽有　気魄　自笑　落々　華髪　不駭　措大（＝学生）　軽薄　独喜　今日　家国（＝国家）　酔裏　瑞靄　聖代　告暁　試筆　呵硯　一酔　世上　容易　落托　先写　佳気

亦尋常　有文章　一枝香　麗初陽　五雲長　太平光　拝年忙　酒三觴　独凄涼　有行蔵　已無望　有希望　抱剛腸

百慮忘　翰墨場　已夕陽　墨吐香　国運昌　放瑞光　旗影颺　自見祥　鬢有霜　百事忘　志不償　仍倔強　老故郷

真

●○○ 瑞雲新　歳華新　曙光新　此迎新　五雲新　一瓶春　不知貧　一萍身　自成春　入佳辰

●●○ 歳此新　詩筆真　旭日新　万象新　亦一新　一笑真　自有神　感更新　憶故人　別有春

作詩媒　共傾杯　硯池埃　入詩来　草堂隈　瓦盆梅　為君開　自東来　乱書堆　笑顔開　寄詩来　一凡才　不須哀

上野梅　尚未開　詩興催　五彩開　暁色開　買野梅　有別才　花未催　無点埃　点々開　吹夢来　処世才　又快哉

魚

●○○ 意何如　曙光初　故人書　到茅廬　早梅舒　出無車　試書初　柳眉舒　鬢毛疎　一堂虚

●●○ 意晏如　歎索居　日出初　一架書　夢醒初　只読書　感有餘　心自舒　一蠹魚　登校初

天又靄　無一事　文字飲　知己在　遊戯好　詩又拙　才藻在　空碌々　吟夢醒　身壮大　身老大　天下志　児女涙　鶯語滑　身已老

浮生事　詩言志　酔顔好　非容易　前途遠　身多幸　生涯計　相思切　乾坤濶　鶯声渋　吟情動　春風遍　歓無極　新詩筆　同慶好

作例

甲子新年

定井香雁

一年又是暦回初
依旧蓬蒿没我廬
尚友独存千古上
不妨人喚蠹書魚

一、韻　字　表

平声三十韻の主な字をあげ且つ両韻として誤りやすいものを注意しておいた。この表を利用する人は詩韻含英のない人である。余りむつかしいものは省いておいた。この韻の字が下に来るのだから、どうも困る。富山房の服部宇之吉、小柳司気太共著の詳解漢和大辞典には下に来る熟語があげてある。この韻表で五言古詩の長篇を作って韻を覚えるとよい。音も訓も仮名づかいは気分にまかせてやったから通俗を旨としている。

一　東

東ヒガシ　空ソラ ムナシ　虹コウ ニジ　桐キリ　功ヲガラ　終ヲワル　公キミ　躬ミ　風カゼ　中ナカ ハ仄　同オナジ　崇タカシ　濛クラシ　紅アカシ　雄ヲヲシ　蓬ヨモギ　隆サカン ナリ　窮キワマル

豊ユタカ　工タクミ　弓ユミ　忠タダシ　充ミツル　童ワラベ　篷トマ　銅アカガネ　宮ミヤ　翁オキナ　瞳ヒトミ　融トク　叢クサム ラ　筒ツツ　虫ムシ　穹オオソラ　鴻オオトリ　衷マコト　楓カヘデ

攻セメル　忡ウレフ　通トオル　瞳日ノデ ルサマ　籠カゴ　瓏アキラ カナ　櫳マド　蒙クラシ オロカ　沖ヤハラカ　葱トシタ ソウ アオ〜　烘ヤク　夢クライ ユメハ 仄用

二　冬

冬フユ　松マツ　溶トケル　封フウズル　鍾アツム　重カサナ ル　オモイ ハ仄　濃コマヤ カ　衝ツク　恭ウヤウヤシ　鐘カネ　蹤アト　慵モノウ　供ソナフ　宗ムネ　胸ムネ　蜂ハチ　農ノウ　従シタガ フ　峰ミネ

庸ナミ　筇ツエ　蛩キリギ リス　鋒ホコ　龍タツ　峯ミネ　容イル　舂ウスツク　逢アフ　縫ヌウ　烽ノロシ　凶ワルシ　蛬キリギ リス 平仄 両用　縱タテ ママ　ホシイ ハ仄　淙ソウ ソウグ 両用　溶水ノ形容 両用

三　江

江カワ　矼トビイシ　釭サラ　尨ムクイ ヌ　窓マド　邦クニ　舡サカヅキ　降クダル　雙ナラブ　腔ハラ　撞ツク　幢ハタ　淙ソウ ソウグ 両用

四　支

支ササエル　枝エダ　移ウツル　為ナスタメ スル ハ仄　垂タル　吹フク　陂ツツミ　碑イシブミ　奇メヅラシ　宜ヨロシ　儀ノリ　皮カワ　児ワカモノ　離ハナル　施ホドコス　知シル　馳ハス　池イケ　規ノリ

危アヤシ　夷エビス　姿スガタ　遅オソシ　亀カメ　眉マユ　悲カナシ ム　之コレ ユク　芝シ　時トキ　詩シ　棋ゴ　旗ハタ　辭コトバ　詞コトバ　期トキ　祠ヤシロ　基モトイ　疑ウタガ フ　姫ヒメ

絲イト　司ツカサ　医イシヤ　帷トバリ　思オモフ ミハ仄　滋シゲシ　持モツ　随シタガ フ　痴オロカ　維ツナグ　巵サカヅキ　慈シイツク シム　遺ノコル ハ仄　肌ハダ　脂アブラ　雌メス　披ヒラク

嬉タノシ ム　炊カシグ　湄ホトリ　籬マガキ　疲ツカル　茨イバラ　卑ヒクシ　騎ノル　岐ツジ　誰タレ　私ワタクシ　斯コレ　窺ウカガフ　欹ソバダツ　欺アザム ク　羈タビ　髭ヒゲ　資モト　飢ウエ

錐キリ　涯ホトリ　追オフ　萎シボム　治オサム ハ仄 アリ　怡タノシ ム　嗤ワラフ　噫アア　師シ　曦ヒ　鸝ウグヒス　衰オトロフ　頤オトガヒ　推オス　麗●ウルハシ ○真寶

五微

微(ビ)カスカ　薇(ビ)ワラビ　暉(キ)ヒカリ　輝(キ)カガヤ　揮(キ)フルフ　囲(イ)カコム　幃(イ)トバリ　違(イ)タガフ　霏(ヒ)フルサ　非(ヒ)カホル　妃(ヒ)キサキ　緋(ヒ)アカシ　飛(ヒ)トブ　非(ヒ)ワルイ　扉(ヒ)トビラ　肥(ヒ)コエル　威(イ)イコウ　祈(キ)イノル

六魚

畿(キ)サカイ　機(キ)ヲリ　譏(キ)ソシリ　磯(キ)イソ　饑(キ)ウウ　稀(キ)マレ　希(キ)ノゾム　依(イ)ヨル　衣(イ)コロモ　巍(ギ)ケハシ　帰(キ)カヘル　晞(キ)カハク　幾(キ)キザシ チカシ ハ仄　魚(ギョ)ウワ　漁(ギョ)スナド リ　初(ショ)ハジメ　書(ショ)フミ　舒(ショ)ノブ　居(キョ)スマイ　裾(キョ)スソ　車(シャ)クルマ　渠(キョ)ホリ　余(ヨ)ワレ　予(ヨ)ワレ　誉(ヨ)ホマレ 平仄 両用　輿(ヨ)クルマ　餘(ヨ)アマリ　鋤(ジョ)スキ　疎(ソ)マバラ　蔬(ソ)ヤサイ　梳(ソ)クシケ　虚(キョ)ムナシ　徐(ジョ)オモム　閭(リョ)ムラサト　廬(ロ)イホリ　除(ジョ)ノゾク　儲(チョ)タクハヘ　如(ジョ)ゴトシ　墟(キョ)アト　攄(リョ)ノブ　諸(ショ)モロモロ　疏(ソ)マバラウトム

七虞

虞(グ)オソル　愚(グ)オロカ　娯(ゴ)タノシム　隅(グウ)スミ　無(ム)ナシ　蕪(ブ)アレル　巫(フ)ミコ　盂(ウ)ハチ　癯(ク)ヤセル　衢(ク)マチ　儒(ジュ)ガクシヤ　濡(ジュ)ウルホス　鬚(シュ)ヒゲ　株(シュ)カブ　誅(チュウ)ツミス　蛛(シュ)クモ　殊(シュ)コトナリ　愉(ユ)タノシム　区(ク)トコロ　駆(ク)カル　朱(シュ)シュ　珠(シュ)タマ　趨(スウ)ハシル　扶(フ)タスク　符(フ)ワリフ　雛(スウ)ヒナ　敷(フ)シク　夫(フ)ワット　膚(フ)ハダ　紆(ウ)メグル　厨(チュウ)クリヤ　倶(グ)トモニ　駒(ク)コマ　謨(ボ)ハカリゴト　蒲(ホ)ガマ　胡(コ)エビス　湖(コ)ミズウミ　乎(コ)助字　壺(コ)ツボ　狐(コ)キツネ　弧(コ)ユミ　孤(コ)ヒトリ　宰(コ)ツミ　菰(コ)マコモ　徒(ト)ナカマ　途(ト)ミチ　図(ト)ヅ　屠(ト)ホフル　奴(ド)シモベ　呼(コ)ヨブ　吾(ゴ)ワレ　呉(ゴ)クレ　租(ソ)ネング　鱸(ロ)ススキ　炉(ロ)イロリ　芦(ロ)アシ　蘇(ソ)ヨミガエル　烏(ウ)カラス　枯(コ)カレル　粗(ソ)アラシ　都(ト)ミヤコ　鋪(ホ)シク 店舗 ハ仄　吁(ク)ナゲク　需(ジュ)モトム　臾(ユ)ヨ 一　渝(ユ)カハル　迂(ウ)マワリドウシ　拘(コウ)ツナグ　糊(コ)ノリ　沽(コ)カフ　逋(ホ)シヤクセン　徂(ソ)ユク　晡(ホ)ヒグレ　瓠(コ)ヒサゴ 平仄 両用

八斉

斉(セイ)ヒトシ　臍(セイ)ヘソ　黎(レイ)タミグサ　犁(リ)スキ　妻(サイ)ツマ 動詞 ハ仄　萋(セイ)シゲル　凄(セイ)スゴシ　悽(セイ)イタマシ　堤(テイ)ツツミ　低(テイ)ヒクシ　題(ダイ)カキツケル　提(テイ)ヒツサゲル　蹄(テイ)ヒヅメ　啼(テイ)ナク　雞(ケイ)ニハトリ　稽(ケイ)カンガヘル　蹊(ケイ)コミチ　霓(ゲイ)ニジ　西(セイ)ニシ　栖(セイ)スム　棲(セイ)スム　嘶(セイ)イナナク　梯(テイ)ハシゴ　躋(セイ)ノボル　齎(セイ)モタラス　迷(メイ)マヨフ　泥(デイ)ドロハ仄　渓(ケイ)タニ　閨(ケイ)女ノヘヤ　携(ケイ)タヅサフ　畦(ケイ)アゼ　締(テイ)ムスブ 平仄 両用

九佳

佳(カ)ヨシ　街(ガイ)マチ　鞋(アイ)ワラジ　牌(ハイ)カンバン　柴(サイ)シバ　釵(サイ)カンザシ　崖(ガイ)ガケ　涯(ガイ)ホトリ　階(カイ)キザハシ　偕(カイ)トモニ　諧(カイ)カナフ　骸(ガイ)シカバネ　排(ハイ)オシノケル　乖(カイ)ソムク　懷(カイ)オモフ　儕(サイ)トモ　埋(マイ)ウヅム　斎(サイ)シヨサイ　蝸(カ)カタツムリ　娃(ア)オンナ　皆(カイ)ミナ　蛙(ア)カエル　鮭(ケイ)サケ

十灰

灰(カイ)ハイ　恢(カイ)サカンナ　魁(カイ)サキガケ　隈(カイ)クマ　回(カイ)メグル　徊(カイ)徘一　槐(カイ)エンジユ　枚(マイ)マイ　梅(バイ)ウメ　媒(バイ)ナカダチ　煤(バイ)スス　瑰(カイ)タマ　雷(ライ)カミナリ　罍(ライ)サカヅキ　頽(タイ)クヅル　催(サイ)モヨホス　摧(サイ)クダク　堆(タイ)ウヅタカシ　陪(バイ)ハンベル　杯(ハイ)サカヅキ　醅(バイ)サケ　開(カイ)ヒラク　哀(アイ)カナシム　埃(アイ)ホコリ　臺(ダイ)ウテナ　苔(タイ)コケ　該(ガイ)カネル　才(サイ)ハタラキ　材(ザイ)モク　財(ザイ)タカラ　裁(サイ)タツ　来(ライ)クル　栽(サイ)ウエル　哉(サイ)カナ　災(サイ)ワザハイ　猜(サイ)ソムネ　胎(タイ)ハラ　台(ダイ)天台　孩(ガイ)コドモ　培(バイ)ツチカフ　皚(ガイ)シロシ　纔(サイ)ワヅカ　抬(タイ)モタグ　駘(タイ)ノドカ 平仄 両用　咍(カイ)ワラフ　莱(ライ)アレチ　嵬(カイ)ケハシキ

十一真

真(シン)マコト　因(イン)ヨルワ　茵(イン)シトネ　辛(シン)カラシ　新(シン)アラタ　薪(シン)タキギ　晨(シン)アシタ　辰(シン)トキ　臣(シン)オミ　人(ジン)ヒト　仁(ジン)マコト　神(シン)カミフシギ　親(シン)シタシ　申(シン)ノビル　伸(シン)ノブ　身(シン)ミ　賓(ヒン)ドマウ　浜(ヒン)ハマ　隣(リン)トナリ　鱗(リン)ウロコ　麟(リン)キリン　珍(チン)メヅラシ　嗔(シン)イカル　塵(ジン)チリ　陳(チン)フルシ　春(シュン)ハル　津(シン)ワタシ　秦(シン)国名　頻(ヒン)シキリナリ　蘋(ヒン)カオリグサ　顰(ヒン)カム　銀(ギン)シロガネ　垠(ギン)カギリ　筠(イン)タケ　巾(キン)キレ　民(ミン)タミ　貧(ヒン)マヅシ　淳(ジュン)スナヲ　醇(ジュン)サケ　純(ジュン)マジリケナシ　脣(シン)クチビル　倫(リン)ミチトモ　綸(リン)ツリイト　匀(イン)トトノフ　旬(ジュン)十日　巡(ジュン)メグル　均(キン)ヒトシ　馴(シュン)ナレル　鈞(キン)オモサ　臻(シン)イタル　姻(イン)ヨメイリ　宸(シン)ゴテン　寅(イン)トラ　旻(ビン)ソラ　皴(シュン)シワ　遵(ジュン)シタガフ　振(シン)フル 仄用 モ可　呻(シン)ウメク　瀕(ヒン)ミズギワ　泯(ビン)ホロブ　燐(リン)リン　竣(シュン)フハル　彬(ヒン)アキラカ　輪(リン)ワ　淪(リン)シズム　循(ジュン)メグル シタガフ　瞋(シン)イカル

十二文

文(ブン)フミ　聞(ブン)キコエ ヒヨウバンハ仄　紋(モン)ヒヨウバン　蚊(ブン)カ　雲(ウン)クモ　氛(フン)気　分(ブン)ワカル 身分 本分 ハ仄用ス　紛(フン)ミダル　芬(フン)カンバシ　焚(フン)ヤク　墳(フン)ハカ　群(グン)ムラガル　裙(クン)スソ　君(クン)キミ　軍(グン)イクサ　勤(キン)ツトム　斤(キン)ワノ　筋(キン)スジ　勲(クン)イサワ　薫(クン)カホル　曛(クン)イリヒ　醺(クン)ヨウ　耘(ウン)クサギル　云(ウン)イフ　濆(フン)ミズギワ　員(イン)カズ　欣(キン)ヨロコブ　芹(キン)セリ　沄(ウン)水流ル　殷(イン)サカン

十三元

元(ゲン)モトハジメ　原(ゲン)モトハラ　源(ゲン)ミナモト　園(エン)ソノ　猿(エン)サル　轅(エン)クルマノエ　垣(エン)カキ　煩(ハン)ワズラワシ　繁(ハン)シゲシ　藩(ハン)マガキ　魂(コン)タマシイ　渾(コン)ニゴル スベテ　褌(コン)フンドシ　温(オン)アタタカ　孫(ソン)マゴ　門(モン)カド　尊(ソン)タウト　樽(ソン)タル　存(ソン)アル　蹲(ソン)ウヅクマル　敦(トン)アツシ　暾(トン)アサヒ　屯(トン)タムロス　豚(トン)ブタ　村(ソン)ムラ　盆(ボン)ボン　奔(ホン)ハシル　論(ロン)ルロンズ　樽(ソン)名詞 ハ仄　坤(コン)乾一　昏(コン)クラシ　婚(コン)コヨメイリ　痕(コン)アト　根(コン)ネ　恩(オン)メグミ　呑(ドン)ノム　援(エン)ヒク　番(バン)平仄 両用　鴛(エン)オシドリ　掀(ケン)アガル　捫(モン)ヒネル　跟(コン)クビス カガト　繙(ハン)ヒルガエル　媛(エン)両用

十四寒

寒(カン)サムシ　韓(カン)国名　翰(カン)トリノ ハネ 平仄 両用　丹(タン)アカシ　弾(ダン)ハジク 仄用 タマハ　殫(タン)ツク　単(タン)ヒトリ　安(アン)ヤスシ　鞍(アン)クラ　難(ナン)ガタシ 名詞 仄用 ハ　餐(サン)クラフ　灘(ダン)ナダ　壇(ダン)マユミ　檀(ダン)マユミ　残(ザン)ソコナフ　干(カン)ホトリ　肝(カン)キモ　竿(カン)サオ　乾(カン)カワク　闌(ラン)タケナハ　欄(ラン)テスリ　瀾(ラン)ナミ　蘭(ラン)ラン　看(カン)両用 平仄　刊(カン)ハンニ ヌル　丸(ガン)タマ　桓(カン)タケシ　紈(ガン)キヌ　端(タン)ハシ　酸(サン)ス　団(ダン)カタマリ　搏(タン)ハネウツ　攢(サン)アツマル　官(カン)ヤク　観(カン)ミル　冠(カン)カンムリ 動詞 ハ仄　鸞(ラン)トリノ名　鑾(ラン)スズ　欒(ラン)団一　巒(ラン)ヤマ　歓(カン)ヨロコブ　寛(カン)ヒルシ　盤(バン)マルダカ　蟠(バン)マルダカ　漫(マン)ヒロシ 平仄 両用 ミダリニ ハ仄　歎(タン)ナゲク 平仄 両用　珊(サン)タマ　溥(タン)シゲシ　棺(カン)カン　鑽(サン)キル 平仄 両用　完(カン)マッタシ　般(ハン)一般

十五刪

刪(サン)ケヅル　関(カン)トザセキ　彎(ワン)ユミ　湾(ワン)イリエ　還(カン)カエル　環(カン)タマ　寰(カン)セカイ　斑(ハン)マダラ　班(ハン)ハン　頒(ハン)ワカツ　蛮(バン)バン　顔(ガン)オホ　姦(カン)シマ　菅(カン)スガ　攀(ハン)ヨヅ　頑(ガン)カタクナ　山(サン)ヤマ　鰥(カン)ヤモメ　間(カン)アイダ　閒(カン)シズカ　閑(カン)ヒマ　艱(カン)ナヤム　慳(カン)ヲシム　潺(セン)水音　殷(アン)アカシ　湲(カン)水音　訕(サン)ソシル　患(カン)ウレフ 平仄 両用　潸(サン)ナミダノオチル 平仄 両用